

研究ノート

毛利家の武道・山頭火・蒙古からの引揚
——真溪涙骨と養女・芙美子をめぐる記録と記憶

安溪遊地

わが家には、母・芙美子（一九一九～一九九九）の遺品として西本願寺の辞令が四二通残っている。これは、山口県の真宗本願寺派僧侶であった香川葆晃（ほうこう、一八三九年三月～一八九八年一〇月、図1）の遺品を側室のヨ子（ヨネ、一八五六～一九二七）が守り、娘のヒデを通して孫の芙美子に伝えられたものである。葆晃は長く京都の本山にあって大学林（龍谷大学の前身のひとつ）総理などを勤め、島地黙雷・大洲鉄然・赤松連城などとともに、松陰にも大きな影響を与えた僧月性の流れを汲む長州僧の一人であった。ヨネは、毛利藩の武士宍戸潤平の家に育ち、兄には日露戦争の折の大蔵大臣で、伊藤博文と寺内正毅の間の第二代（韓国）統監であった曾禰荒助（そね・あらすけ、一八四九～一九一〇）がいた（安溪・安溪、二〇一三、Ankei et al. 2013）。

このノートは、地域学を血の通ったものとするための第一歩としての自分学研究のための資料である。全京秀（印刷中）や安溪遊地（二〇一五）がその重要性を指摘するように、帝国の植民地とその時代をめぐって、支配する側とされる側の双方から、その時代についての記録と記憶を掘りおこしていくという基礎的作業の成果である。

また、二〇一五年度は、山口県立大学の文部科学省COC事業「地（知）の拠点」において、やまぐち学マイスターを養成する講座の中で、私は大学院向けの講義を地域に公開し「宮本学と自分学」と題して、いかに宮本常一の経歴を未来に手渡していくかを問い続けている。これはそのための講義ノートの性格ももつものである。

芙美子は、五歳の時に祖母のヨネと初めて会っている。大正時代に生まれた女の子は、橋を渡る時には、必ず欄干の外か上を通ったり、鬼ごっこするときには、お寺の大屋根のてっぺんにまで登ったり、毛利家の武士の娘だった婆様に、打ち首の話などを聞いたりして育ったというわけではないと思うのだが、これは、そんな子供時代を送った芙美子が、脳腫瘍の手術を受ける直前に、薄れ行く記憶をたぐりよせて書き上げた生涯最後の作品である（結局、手術の半年後の一九九九年一月二四日未明に亡くなる）。小説風のものが中心の芙美子としては珍しく、地名人名ともに実名で登場する。毛利家の武道の心得のある「お婆様」ことヨネが泥棒を押さえるところなどは圧巻である。

日本一強いおばあさんの話（芙美子五歳）

「記憶のある裡に 大正時代のある子供の生活」抜粋

「そなたは父親に死なれても余り泣きもせず聞き分けのよい気丈な子じゃ、これからは婆々様がそなたに武道を少し教え姉に優る子供に育てよう」
頭を撫でる祖母の手の暖かさで何となく気がほぐれたのだろう。私は暖かい祖母の手を両手で挟みお婆様を見上げ笑顔になった。



図1 香川葆晃（『真宗大辞彙』より）

「お、そなたは人見知りをせぬ良い子じゃ、これからは婆々様と寝ようぞ、おわかりか」

「ハイ、今日からお婆様の傍で寝ます。お婆様美チャンにお話しして下さい」

「よしよし、お話はいくらもしてとらせよう。だが自分のことをチャンづけでいうてはならぬぞ、目上にものをいう時はもっとへりくだって、私といわねばならぬ、おわかりか」

「ハイ、わかりました」

「よしよし、秀子やこの子は存外聞き分けがよい、もっとお転婆かと思うたが存外じゃ」

私は自分が誉められているのは解ったが、祖母の言葉遣いが普通の女の人と違って、何かしら大人の男の人が遣う言葉のように思えて、不思議だった。祖母が立ち去ったあと、母に祖母の言葉遣いに就いて尋ねてみたが、その訳はよく分かった。

「お婆様は毛利藩の侍の娘で幼い時から上にも下にも男兄弟が居て、その為の武家の習慣として剣道とか武道を幼い頃から習い、お婆様ほどの兄弟よりも熱心に習い『この子が男ならどれほど安心か分からぬ』と嘆かせたそうで、そのせいで今でも普通の男より強いんだから家^{うち}みたいに女子供ばかりの家が気になって来て下さったの」

私の頭を撫でながらの母の言葉に私はすっかり満足して、何かしら気分がホッとするのだった。というのは丁度その頃あちこちの家に良く泥棒が入り、子供心に夜が不安だったせいである。

「ね、お母さん、もし泥棒が家に来てもお婆様がいらっしやれば大丈夫なの」

「そうですね、どんな男が入って来ても一度お婆様に掴まると身動きできなくなるから、美チャン、今日からもう心配しないでお婆様の傍で休みなさいよ」母にそういわれると子供心を感じていた一種の不安がすーっと消えるのを覚える。(中略)

何時の間にか婆や達も姉や母も部屋から消え私はお婆様と二人だけになり気が付くと布団の中だった。それからどれほどの時間がたったのだろう。私はオシッコがしたくなり目覚めた。枕元には灯心の燃えるあんどんの光で周囲が明るい、一人ではお便所に行けないので、何と無く目を開いて迎いをそれとなく見回す。

すると何か動いている。あんどんの光で見るともなく見ていると、影は見たことのない男の影である。私は恐ろしくなり、あれが泥棒という者ではないかと、とっさに思う。

「お婆様、お婆様泥棒がいる、美チャンこわい、お婆様おきて頂戴」

私は思わず、大きな声になった。

「何じゃチビとババアか」

男は私の傍によると頬を撫でる。

「お婆様いやだあ、泥棒が撫でたよう！」

絶叫に近い子どもの声は一辺に家中を起こしたようだ。瞬く間に家中のあかりがつき母も姉も兄も私と祖母の部屋にやってきたが、

「ヤーイ、泥棒がお婆様の膝の下で泡吹いてるよう」

兄の大声におどろいて隣に寝ている筈の祖母をみると、祖母は泥棒を押さえつけ、

「秀子さん丈夫な紐を持ってきなされ、身動きできないよう縛りつけるほどに」と、ニコニコ笑っている。泥棒は苦しうに溝落ちを手で押さえながら、「クソババアとガキだと思ったのに、なんちゅうこっちゃ」と、思っている。

「タダのパバと思うたがそちの失敗じゃ、ワシの武術で死ぬものも居るのぢや、ひと様のものを夜に盗もうとする悪党には当然の報いぢや、もう一発喰らわせてつかわそうか」

祖母が少し身動きすると、泥棒はベシヤンコの姿になり、

「もう悪いことは致しまへん、へえ何卒堪忍しとくれやす、ワシ息も出来まへん、もう悪いことしまへん、へえ何卒堪忍しとくれやす」

子どもの私が見ても一寸可愛想な程泥棒は青い顔を畳にすりつけ、お腹を痛そうに押さえつけ、涙を流している。

「そなたごとき悪者には容赦せぬが婆々の武道じゃ、三人や五人が掛つて来ようともびくともせぬのが毛利家の武道というものじゃ。まだ生かしてとらせただけ有難いと思わつしやれ、婆々と子供と侮つたがそなたの地獄じゃ。痛かろう、二度とこのような悪さをするでないぞ、世の中にはまだまだ強い婆様が一杯おるぞよ」

「へえ、もう二度と悪さは致しまへん、けどこんな強い婆様におうたは初めてじゃ」

「馬鹿いうな、我等年寄りはそのたとえ違ひ皆武道の心得があるのじゃ、性懲りものう悪さをすれば何れそなたの命はなくなるのじゃ、わかりたか」

「へえ、もう肝に命じてわかりました」

艶のある泥棒の額を祖母は二本の指でチョイと押したが、彼は「痛々々」と大声と共に涙をポロポロ零し、子供心にも一寸この泥棒が可愛想だった。

「オッチャン、お婆様の強いこと知らなかったの、お祖母様日本で一番強い人だったのに、そんなところへ泥棒に来たから罰当たったんや」

「さいでおます。さいでござります。へえ」と、ヘコヘコ頭を下げてみると、姉たちが呼びに行つたお巡りさんが三人も来て、

「こら正公、又お前か、今度の懲役は長いぞ、ここの御隠居には一ころやろ、ざま見る世の中なめとるから罰じゃ」

正公といわれた泥棒は鼻水をすすりながら、

「へえ強い御隠居様、もう泥棒は懲り懲りです。今度出てきたらマトモに働き御挨拶に参じますで伺います。へえ」

「まさ、お前その言葉忘れるなよ」お巡りさんの一人が祖母の前にやってきて、

「御隠居さんは相変わらずお達者で結構でございますなあ。一度我々にもその毛利家の武道というもの教えて貰いたいもんですなあ」

「何をお云いやす。へもない泥棒じゃから簡単に済んだだけの事で貴方達専門の方々にお教えできるようなもんでありませんよ」

余り解らない大人の言葉に退屈して私はお光のお婆あにトイレに連れてもらいすぐ又寝てしまった。

お婆様はそれから四十五日も家に逗留され私は今様という昔の唄を幾度も祖母に習つたりお婆様の子供時代の毛利家の御殿の話など聞いて感心したり大変だったのだなあと驚いたりして毎日朝が待たれるような日を過ごした。(中略)

祖母の家は毛利の次席家老というものであつたらしく、一番心に残ることは次の様な話。

或日祖母が庭に面した小部屋でお習字をしていると突然庭でバシツという鋭い音が聞こえ思わず立ち上がり障子を開けてみると寅次といわれていた中間の首がコロリと庭の苔の上に転がり父親が刀の抜身を右手に下げ「見るでない！」と怒声をあげたので祖母は驚き一計駆けて台所に行き泣きながら母に縋りつくとも母親は優しく祖母の背を撫で「理助は打首にされたのであろう」といわれた。お婆様は打たれたのが誰か見分ける暇もなく駆け込んだので母親への返事は出来なかつたこの事である。後々の話であるが理助という中間は父の氣に入りだったが幾度も金銭を誤魔化しその上女中を手当り次第孕ませる悪党だったので祖母の父の勘氣に触れ打ち首にされたとの事だった。

何故幼い私がそんな話を知っているのか？ と人は不思議に思うだろうが祖母がいきなりそのような荒っぽい話をする筈もなく実は泥棒が入つた日の翌日の夕方、私は祖母と二人でお風呂に入り何時もやるように濡れ手拭いの端をもって水を取る為に力一杯振り下ろしたその音が祖母に幼いころの手打ちの音を思い出させた事

を知り、私はもう二度と手拭いの端をもって水気を取ることは止めようと決心したものだ。 (後略)

『中外日報』社主・真溪涙骨との出会い (芙美子一八歳)

昭和二三(一九三八)年三月五日付けの『中外日報』一一五六〇号の「編輯日誌」に次のような記事を社主の真溪涙骨(またに・るいこつ、一八六九—一九五六)が書いている。

……○私の秘書芙美子は今尚オカッパの少女である、春あけて十九歳△顔に白粉一ツ塗らず装身極めて野趣満々だが、その走足の早いことランニングの選手であり、力の強いこと恰も柔道三段格△或日、僕は途上電車と自動車の間に挟ってアハヤ危機の迫れる一刹那△老いたれども十六貫の男一疋を背後からムズと抱へてボンと二三間横側へ避難せしめた△その早業その凄腕その無邪気に群り見る人々は嘩然として口を開いてゐた(四日)。

芙美子の遺品に一枚の写真がある(図2)。芙美子(向かって右)ともうひとりの『中外日報』社員が、社主である涙骨をふざけて両方からぶら下げて歩いている場面である。裏には、昭和十七年二月一〇日、都ホテルとある。

前年三月二六日付け『中外日報』一一一七六号には、「○高島清^{タカシマ}氏の内囁に依り華頂高女出身の西田芙美子は新に入社する。」という記事が見えるから、社主を交通事故から救ったのは入社一年目のできごとであろう。高嶋清は、後述の高嶋米峰の子である。

宗教新聞の社主として自由闊達な論陣を張った涙骨の秘書として、後には娘として身近にあった芙美子は、私の母であった。そして、涙骨とともにあった時代の芙美子の武勇談を、私は聞かされて育った。次はその一例である。



図2 涙骨と芙美子 (右)

今次の大戦中のことです(イラク戦争のことではありません)。

京都の市電に、涙骨社主とおとも秘書が乗って座っていたところ、兵隊さんがずいぶん威張って乗ってきました。それを見て、涙骨さんという人はあらゆる権威をふりかざす者が大きらいな人ですから、「兵隊のような人間のくずがいばっておるようでは、この国もあんまり長うないな」と聞こえよがしに言ったのです。

聞きとがめた兵隊は、涙骨さんの目の前にやってくると、佩剣を握って上下にゆすりながら、兵隊「なにー！ 今なんと言った、もう一度いうてみい！」とすごみました。

涙骨「兵隊のような人間のくずがいばっておるようでは、この国もあんまり長うないな！」と繰り返したものですから、その兵隊は、逆上して剣を抜こうとしました。

その時、横にすわっていた秘書は、手で兵隊を制止して、しずかに魔法の言葉を吐きました。
芙美子「尊いお方ですよ。」

とたんにバネではじかれたように兵隊は直立不動となって敬礼し、

「僕は何も取りません。山を歩く人は山のものは何一つとってはいけないものなんです」

批難とも受取れる言葉には哀しみの響がある。私は黙ったまま、Wさんの足跡をなぞって歩く。

妻と死別し子供とも別れ住みただ只管に北山をのみ歩きつづける人の内にひそむものは何なのだろう。「人生も終わりに近いと思いますとね。この山の一步一歩がいとほしくてね、こうして歩きつづけてこの足の止まった時が僕の死であるようにと、そう念じながら歩いているのですよ」

まるで私のところを覗くようなそんな言葉をWさんはふり向きもせずいう。

私はそれと同じ言葉を聞いたことがある。もう三十数年も前だった。

季節は忘れて了ったが、汚い襦袢の羽織とも法衣ともつかぬものを着た垢まみれの男。若い私には三十才以上の男はよほどの爺さんでない限り四十も五十も六十も同じように見えたがその六十余りの汚い男が家に訪ねて来たことがある。私を養女にしていた養父は社会的地位もあり立派な人格も備えた人で、その頃の私が世の中で一ばん偉い人なのだと尊敬していたその養父が訪ねて来た襦袢男を丁重にもてなすのが不審でならなかった。

凡ての疑團は須く氷解させるべしというのが生来の国是となつてゐる私は茶菓を出す序にその男を躡めて言った。

「どうしてそんなに汚いお召物を着ていらつしやるのですか」

「これしかないのです」

「何か二、三枚差し上げてはいけませんか」

「ありがたい。然し僕は毎日山や野を歩くばかりなので頂いてもすぐ汚れるのです」

「何故山や野を歩きつづけていらつしやるのでしょうか」

「旅が僕を呼びつづけるのです」

「お家もご家族もありませんの、歩いてどうにかなるのですかしら」

「歩いてどうもならないから歩くのです。この足の止まった時は死ぬ時です」

私は驚きあきれ少し頭がどうかしているのではなだと思つた。それが種田山頭火という俳人だとずっと後になって知つたが、今Wさんの言葉を聞いているとふつとそんな思出も甦えり、飄々と前を行くWさんに山頭火の面影が重なり、自分もまるでこのままだこまでも歩き続けてゆくような錯覚に陥る。

山腹に近づくに連れ風倒木が多くなる。枝や葉を失つた大木が倒れもせず白い木肌をみせて亭々と青空を限るように幾十本も立つ風景は異様である。

「これが峰床山です。僕はこの風景が好きでね。余分な枝葉を失つた大木が倒れもせずにつっ立っている。荒涼とした中に力強さがあるでしょう。人間もこういう終末を迎えたいものだ、ここへ立つ度に思うんですよ」

Wさんはそういつて深々と煙草を吸い込んだ。……

「歩いてどうもならないから歩く」「この足の止まった時は死ぬ時」という山頭火の美美子への答えがそのまま俳句のようである。

昭和一四年四月一二日付けの『中外日報』（一一八九〇号）の「編輯日誌」に、涙骨は山頭火の来社を次のように書いた。通常俳聖は芭蕉を指すが、涙骨が山頭火をそれほど高く評価していたことが分かる。

晴○俳聖種田山頭火氏は豊田茂氏と同伴来社△ただ一ト時、げにも面白く爆笑を交わせた△卓上に筆硯あり、色紙に「竹」を描く△山頭火はこれに賛して

「空へ若竹のなやみなし」と添へらる……

美美子の文章では涙骨の自宅に迎えたように書かれているが、涙骨の「編輯日誌」では「来社」になっている。私が美美子から聞いた言葉を補っておく。

ものすごく汚い人が、中外日報社に来たことがあって、同僚に「ねえねえ、あの臭い人だれ？」と聞いたら、「しっ！ 山頭火という偉いや」と言われたことがあったのよ。そのあと何かを受け取っていたようだったけど……。

このときの山頭火の日記には、次のようにあるから涙骨は山頭火に経済的な支援をしていたことがわかる。そして山頭火はいつものようにその金を酒に使ってしまつたらしい（『旅日記 昭和一四年』）。

四月八日 曇、春樹画房。

電車賃がないから歩いて街はづれの春樹君を訪ねる、折よく在宅、ほつとした。

春樹君はおとなしい画家である、そして閑静な住居である、古風な武家屋敷はだいぶ荒廃してはゐるが、なんともいへない寂をつけてゐる。

夜は家族の方々と共に御馳走になつた、ゆつたりと落ちついて頂戴した。夢もやすらかであつた。

四月九日 半晴半曇、京都。

頼みにくかつたが、押して頼んで旅費を借りた。

電車で梅田へ、そしてまた電車で京都へ。

豊田君を訪ねる、不在、仙酔楼君を訪ねる、在宅、ちよつと話して、それから充夫居の句会へ。

一杯機嫌でしゃべつた、しゃべつた。

更けて一人で京都駅へ。

待合室で意外にも北朗君に逢つた。

△腰掛に寝て夜を明かした、朝になつたので歩いて豊田君を工場舎を訪ねる、だいぶ待つてやうやく逢つた、共に市中を散歩し山中を逍遙した。

鯨屋で昼飯を食べ、そして中外社に寄つた、涙骨先生にお目にかゝることができたのはうれしかつた。まことに万年青年のおもかげがある、どこことなく人をひ

きつける徳がある、大いに話して大いに笑つた。色紙二三枚寄せ書きた。

過分の草鞋銭を頂戴して恐縮した。駅まで送つてもらつて、豊田君に別れる、豊田君とは初対面だつたのに、——ありがたう／＼ありがたう。

“旅日記ところ／＼”

四月十日 晴、京都。

——昨夜はよくなかった、京極を歩いたのがまづよくなかった、酒を飯（ママ）んだのがよくなかった、夜のふけるまでぶら／＼したのがよくなかった、金を持つてゐたのが（私としては）さらによくなかった、——所詮、私といふ人間がよくなかったのだ。

豊田君に対してすまない、涙骨先生に対してすまない、私自身に対してもすまないではないか。

私は何をしたか、さしたることはしてゐない、恥づかしいと思ううちにも慰めるところがないでもない、だが、私は恥ぢる、恥ぢないではゐられない。

山口市徳地堀在住の語り部であった、赤木森（あかぎ・はやし、一九二九～二〇〇五）さんから伺った話から、山頭火との別れのところを抄録しておく（全文は安溪・安溪、二〇〇五参照）。高名な俳人も、地元では単にホイト（乞食）と呼ばれていた。赤木少年が満一〇歳だった一九三九年、山頭火が没する一年前の最後の東行への旅立ち前の冬の情景であれば、この同じ旅先で美美子は山頭火に出会い、なぜ襤褸をまとい歩き続けるのかと問いかけたのだ。そして、山頭火の肉体的体臭やはた迷惑な行状を直接に知る人が少なくなるにつれ、次第にその芸術が注目されるようになってきたのだと考えられる。

佐波農林高校の前が太さ一尺あまりの桜並木のある土手になっています。私が子どものころには、ごみ捨て場になって寂しい所でした。秋は曼珠沙華が真っ赤に咲きます。そこに、ホイトが立っていて、手を振って私を呼ぶんです。ホイトは恐ろしいものと思っていましたが見れば種田です。顔見知りだから走って行きました。揚砂のところに板橋があり、流れたら掛けかえの時に使うための杉が植えてある。それに狗留孫山へさす夕日があたります。当時は、おふくろが、毎日草履をつくってくれていました。うちは子どもが多いから、四、五足ぐらいは毎晩作るんですよ。草履は濡れるとすぐにつまらんことになるので、草履を大事にしたいと思つて気をつけて、水たまりを避けながら走つていったことを今でもよく覚えています。

そしたらホイトの種田が私に銭をくれたんです。穴のあいたお金とみかんひとつを私に渡して、「おらあ、一時もどらんでよ」と言いました。それだけです。親に伝えておけとも言わないんです。用件しか言わん人でした。

うちは一家で下手な俳句をするんですが、おかしなものです。あんなにばかにしていたホイトの種田が、今では俳句の大家なんです（安溪・安溪、二〇〇五からの抜粋）。

山頭火以外にも、文人・歌人が涙骨を訪ねる。涙骨が二週間も寝込んで「編輯日記」が途絶えたとき、「病床だより」を美美子が書いている（昭和一六年二月二五日付『中外日報』一二四五二号）。

○この間、暁烏さんが来られたら紹介してほしいといふ人もあったので来て下さるか三日四日待つ内に今度は黙つて帰つて了はれた。帰られてから「京より帰つて涙骨兄に 会ひたさに燃ゆる思ひをしのびつつ、会はでかへりし心汲みてん」と色紙に書いたものを送られる。其文字の飄逸なること、歌の頭が真ん中にあつて、下の句がとつけもない所にあがつて居るなど、とても面白い。早速涙骨から、「君は去り、我は病みつつ春寒し」といふ俳句を書いて送つた。

○吉井勇大人昨日来訪下されたるもお目にかかれず「山にしてわがみはるかす久方の天が下には秋みりけり」

○蘇峰先生から電報や御親書にて御懇切なる御慰問を享く、取り敢へず「師の恩に熱海の梅をしみをり」と返電申し上げた。

○米峰より幸便に託して傘の賛十本送りくる。余程力んで書いてゐてくれるのを悦ぶ。（代、美美子）

暁烏敏（あけがらす・はや、一八七七～一九六七、真宗大谷派僧侶、俳句をよくした）は「さん」、吉井勇（よしい・いさむ、一八八六～一九六〇、歌人）は

「大人」、徳富蘇峰（とくとみ・そほう、一八六三―一九五七、ジャーナリスト）は「先生」、そして高嶋米峰（たかしま・べいほう、一八七五―一九四九、新仏教運動）は呼び捨てである。

涙骨は、徳富蘇峰に贈られた万年筆を愛用していたが、それが東京駅で無くなったが無事に戻ってきた。その愛用の万年筆は、後年涙骨から芙美子に贈られた。シェーファーの製品で、「呈真涙骨先生」と刻まれている。

○前年、蘇峰先生金婚式の当日、特に贈られた金ペン△何うしたものか東京駅の混雑中に無くなってしまった事を汽車に乗ってから知った△大に驚き且つ悲しみ、諸方面へ電報やら急信やらを発する△帰って二日目、それが何処からともなく送り返されて来た△ペン軸には「呈真涙骨、徳富猪一郎、同静子」と刻されてある△成る程と解って天にも躍る喜びを感じた（昭和十四年四月二日『中外日報』「編輯日誌」）

米峰は、芙美子の親戚（母秀子の父である香川葆晃の兄の長男であり、姉晃子と米峰の子高嶋清が結婚している）であるから、敬語をつけていないのだろう。芙美子の遺品中の米峰の写真（図3）の裏には、「昭和二十一年十一月四日高橋写真館主が三鷹の仮寓に來たりて撮影したるもの」と米峰自身が書き付けている。

涙骨は好んで傘の絵を画いた。途中からは自分が傘を代筆していたと芙美子という。その間の事情を示す絵が残っており、その賛に涙骨は次のように書いている（図4）。「之は弟子のかさし傘なり 偽物にもあらず 本物にもあらず 涙骨」

そして、徳富蘇峰、高嶋米峰のような文人や高僧の書画を、中外日報社は常に必要としていた。りっぱに表装して名士やお金持ちに買っていたが、それをポーンナスに回す。物々交換めいた錬金術だが、芙美子はそうした書画をもらって廻る役割をいつも担っていた。そんなある時のこと、

ある名刺の和尚様のところへ朝早くうかがったの。社のためにたくさん書いてくださるので、たびたび伺ったけれど、おみやげってないので、その朝刷ったばかりの新聞をもっていった。

すると、ふすまの向こうから「おー、芙美ちゃんか。そこで新聞ちょっとひろげてみー」とおっしゃるので『中外日報』を広げると「ふーん、今日のニュースは、なにやらとなにやらか。こまかいところまでは見えんけれどもな」といいながら、襖をからりと開けはった。透視術なの。私は「いやあ、管長さん、狐か狸みたい力もってはるんですね！」って言ったの。

それから大分たって、またうかがったとき、なにげなく「管長さん、まだ見えはりますか？」と聞いたたら「憎たらしい娘やな、苦しい修行を大分して、ようやく見えんようになったところや」っていわはった。偉いお坊さんやったわ。

芙美子は、生前、寺の名前も、和尚さんの名前も言っていたが、「名のあるお寺の、名のあるお坊さんやさかい、名前を出して人に言わんといてあげてや」と口止めされたので、いまはこのまま。

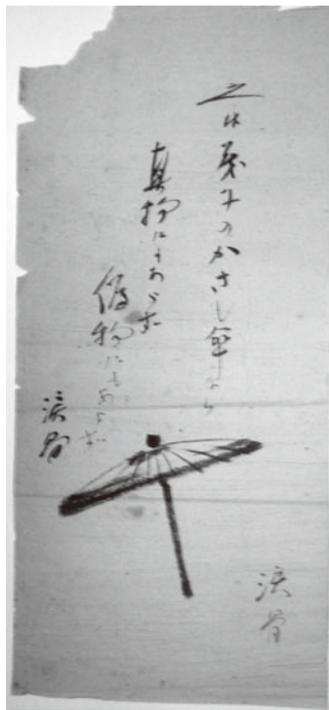


図4 涙骨・芙美子合作の傘の絵

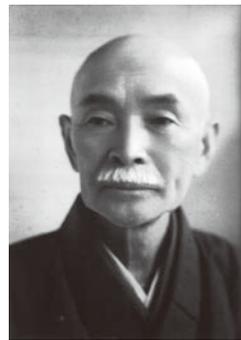


図3 高嶋米峰

非国民と呼ばれ内蒙古へ旅立つ（美美子二六歳）

美美子は、中外日報を退社した。昭和二〇年三月六日付の『中外日報』の「編輯日誌」から。

○美美子は今、大陸に在りて活躍中の素晴らしい優秀青年と婚約成り陽春四月頃、遠征の途に上ることとなった、彼女の天稟才能は深く自他より囑望され社としても大いに将来を期待されていたのだが、時代の急変化に伴って夫君と共に新天地を開拓すべく皆に非常に惜まれつつ一応今月中で退社する事となった。

三月三十一日付『中外日報』「編輯日誌」で結婚相手の名前と行き先が明かされる。

○美美子は去二十三日清純高潔の青年安溪大安氏とめでたく結婚の略式を終わった。そして成るべく早く遠く蒙古の奥地深くへ旅立ちすることになった（中外日報、昭和二〇年三月三十一日）。

美美子の夫となったこの青年は、富山県射水郡大門町（現在の射水市）の本願寺派寺院・常久寺に生まれた。京都で龍谷大学に在学中、学生の俳句サークルに属して、美美子の兄の薫と出会ったのが縁だった。同サークルの親友には後に児童文学者となる中川正文（一九二一〜二〇一一）もいた。大学卒業後、大安は、財団法人仏教園協会の運営する「巴利文化学院」に第四期学院生として所属し（財団法人仏教園協会、一九四三、二五頁）、帝国の宣撫工作のために宗派を越えて若い仏教者をアジア各地に派遣するという方針にそって訓練を受けていた。「巴利文化学院」で訓練中の学院生と教官の写真が、大安の遺品の中にある（図5）。僧服で向かって左から四番目が安溪大安である。裏には「二六〇三、二、於巴利文化学院」と書かれているので、一九四四年二月撮影である。機密とされた修了生の派遣先を示す同時代史料は少ない（大澤、二〇一五）。

○美美子は漸く準備万端整ひ今二〇日一九時出発することになった。大連まで川村三知雄氏同伴、それから奥地は若い花嫁さんの独旅だ。途中恙なく夫君の下へ着けよと切に神仏の加護を祈る。（昭和二〇年四月二一日『中外日報』「編輯日誌」）

美美子を大連まで連れて行ってってくれたという川村三知雄氏を、遊地は一九七〇年に美美子に伴われて宇治市の興聖寺に訪ねたことがある。昭和二〇年当時、『中外日報』関係者であったものかと考えられるが、それ以上の詳細は聞いていない。それにしても、美美子の蒙古行きの経費は誰がどのように調達したのだろうか。



図5 巴利文化学院にて（1944年2月）

昭和二〇年四月、涙骨は長年住んでいた妙法院前の自宅から大徳寺瑞峰院に転居した。涙骨が徳富蘇峰に宛てた書簡（徳富蘇峰記念館蔵）に、次のような記述がある。

「……妙法院前の土地建物を売却しまして老病記者やら美美子の蒙古への結婚等々に捧げました」（昭和二〇年五月一日、転居の報告）
 「美美子は……良い娘で、実は私の相続者として入籍までしてあったのですが、良縁あって蒙古に行きました。母親一人あるも生活上の無能力者であり、其姉にして高嶋米峰の二男に嫁いでいましたが、高嶋の父子両家共に焼け出されて婚は出征、そこで止むなく私の草庵に引取りまして母子を世話しています。美美子はそれで安心して遠く嫁いで行きました」（昭和二〇年七月五日）

『中外日報』昭和二十一年一月三〇日付けには、「生活上の無能力者」として涙骨に庇護されていた、美美子の母親である秀子が涙骨を想って詠んだ和歌五首が載っている。第二首が回想になっているのを見れば、いったんは涙骨の仮寓した山寺に引き取られた母娘は、この記事のころまでにはそこを出ていたらしい。

山寺の師よ 西田秀子

山寺のしじまを破り師の君の大き笑ひに力湧き来し

師の君の掛軸かけし床の間に寝起きせし日のつつましき吾れ

薬湯に温まりつつ眼とぢ師のおもかげををろがみにけり

山路超えて児が求めきしさつま芋ほこほこふかし食めば満ち足る

山寺の寒夜はわびし身じろげばなほわびしさにいねんともせず

図6は、昭和二十二年八月五日に東京の写真館で撮影した写真で、真ん中が美美子、右が姉の晃子、左が葆晃とヨネの次女の秀子で、二人の娘はそれぞれ幼い長男を抱いている。この時秀子は五八歳であった。

蒙古をめざす旅の途上、博多を経て釜山についたという美美子の便りがある。時代は巻き戻るが、美美子六歳の折（一九二五年ごろ）、祖父の葆晃が住職だった山口県新南陽富田政所（現周南市）の善宗寺に養女に出されるということがあったという。わずか三日で寺を逃げだした美美子は、潜り込んだ列車の終点の下関駅で降り、歩いていったら、船がいっぱいあるところへ着いた。たくさん「かまやまいき（釜山行）」と書いてあるのが読めたけれど、そこで警察に保護されて、山口から朝鮮への美美子の冒険旅行は阻止されたのだった。



図6

無事につけました。ありがたう存じます。おだやかなものでございました。

海月が美しく波頭の中を縫って泳いでゐました。ジグザグコースのため多少おくれましたが水の碧さと水平線の彼方のかすみとに現を忘れて見とれてみる裡について了つて、仰山な覚悟の手前、些かあつけなくさへ存じました（朝鮮釜山府にて美美子）（昭和二〇年五月一日『中外日報』「蒙疆への旅から」）

○蒙古自治州の厚和市の哲学修道院教授安溪大安氏より、懇切な長い書信をくれる、美美子も無事着して今は新家庭を営んでゐるとの報（昭和二〇年五月一七

に、先生はいつまでもひきつづけていた。かなしみにあれ狂った美太々の心もいつしか和み、不図生きるよろこびにも似たおもひが芽生える。ありがたう院長さま、私はもう悲しみません。貴方のそのバイオリンは、バイオリンを奏でて下さったおやさしいお心は、いつでも、いつまでも、私に希望をもつことを教えて下さるでしょう。太々は言葉に出せない感謝の目を、柔らかな院長の面差しに瀦ぐのだ。そして十二年。美太々は今、二人の息子と共に懸命にバイオリンを習っている。慕母に悲痛した若い日の自分と、慰めてくれた常先生のやさしい心をつかしみ乍ら。そしていつの日にか、二人の子供達が音楽を味わえることの尊さを体得できることを祈りながら。

美美子の証言によれば、行き先は、厚和市ダルハン旗（現在はフフホト近くのダルハン・ムミンガン連合旗に属する）という場所にあったカトリック修道院だった。美美子によれば神父たちはみなラテン語で会話を交わしていたという。

前記の文章中の安先生こと安溪大安（一九一九年七月〜二〇〇四年一月）は、戦後の家庭内では、現地の子ども達を風呂に入れたら全員が風邪を引いたとか、下駄を作らせたなら孔が真ん中に来ないものなどができたなどの断片的なエピソードを語るだけで、何も書き残してはいない。再び『中外日報』の文章にもどる。

敗戦・引き揚げ（美美子二七歳）

○蒙古結婚の後、絶へて消息なく其生死存亡が皆から案ぜられてゐた美美子さんは夫安溪大安氏と共に幾多の艱難辛苦を嘗め、あらゆる危険を脱して今、天津の知人の家に寄食中にて遅くとも今年中には「二人半」にて帰国する旨の報告が来た。明年一月末には愛の第一子が誕生するのらしい。その母はこの吉報を得て初冬の秋の比叡風の寒さの中にも新生の春が巡り来たやうに喜色満面にてその日を待ち焦れている（昭和二〇年一月七日『中外日報』「編輯日誌」）

○蒙古から遁れて天津に潜んでゐた西田美美子今は安溪夫人は夫君と共に長崎に帰着したとの長電に一同はその無事を喜び近く再会の日を望んでいる（昭和二〇年一月二十六日『中外日報』「編輯日誌」）。

蒙古からの引き揚げの緊迫した状況は、翌年美美子が「終戦・大陸日記」として四回にわたって、『中外日報』に連載した。ソ連軍の侵攻を防ぎ止め、張家口に集結した蒙古在住四万人の邦人の北京・天津への脱出を可能にした根本博中将を指揮者とする日本軍のたたかいは一九八〇年以降いくつか評伝が出ているが（角田、二〇一三など）、昭和二十一年に掲載された手記は、同時代の引揚者の証言として貴重な内容を含んでいる。

終戦・大陸日記（一）

敗戦という現実がこんなにきびしいものだとは思ひもかけぬことだった。内地に帰りさへすればと一筋に恋慕った内地が今日のように暗い世相を展開しようとは在外邦人の一度も考へなかつたことに相違ない。

引揚者の多くは私の様にまだ「帰つて来た」といふおもひで一杯になって、このめまぐるしくきびしい世間に対しては茫然とした感で眺めてゐるのではなからうか。世は新しく建て直されねばならない、そして私達も古い回想の世界から脱皮して新生しなければならぬ。くらい惨めな過去から立上つて、のぞみある現在を生きねばならない。

八月九日蒙古厚和市の日本居留民団では蒙古新聞の社員がソ連との開戦の虚実についての情報蒐集に躍りとなってゐる、或者は決定的だといひ他は虚報だといふ、しかも両者とも本能的に戦争事態の悪化だけは感づいてゐた。粧はれた様な平和の裏面にある暗黒に、凝然と瞳をこらしてゐた、それは、故国を遠く離れてゐるものの感覚的な鋭敏さだったらう。

八月十日いよいよ決定した事実が確められると市街は俄に騒然としはじめた。厚和は日本軍が進駐してから十年近くもなつてゐるし表面だけでも政治行政は整つてゐたのだから軍部では一度防衛することにきめたのだらう、兎も角婦女子のみ張家口まで引揚げることになつた。

十日からの二三日、居留民のなめた慌しさと不安とはそこが奥地であるだけに必要以上に大きなものがあつた。支那側の警察と蒙古軍には反乱の気配があるし外蒙軍はいつ草原の彼方から攻めてくるかわからない、又十万余る市民も今までから日本に服し切つてゐたとは決して言へない。私達は赤裸にされて敵中に抛り出されてゐるやうな不安の裡にそれぞれ幾年間かに亘る生活の始末に奔走した。

多くの家財道具や衣類は瞬く間に処分され布団包み一個と梱二三個に旅装はととのへられた。

蒙古の京都といはれてゐる厚和の街、榆やポプラや楊柳はアスファルトの街並に高い蔭を落としてゐた、遠く蒙古草原にまで聯る蔭山々脈からは清い流れが街々を潤し河の兩岸には緑の牧草がはてもなくひろがり、羊や馬や駱駝は三々五々群れだつていつまでも陽を楽しんでゐる。六月になると月路の涯まで灰白く阿片の花が咲きつづき、風のない日はかなしいまでに澄んだ高い碧空だつた、もう再び訪れることもない厚和、乗車間際の私達の脳裡に、それは鮮明な印象として刻みこまれた。窓の外には残留する男の人が家族たちに昏い瞳をなげかけてゐる。このまま会へなくなるのか、又会ふ日もあるのか、家族達はどんなにして生きてゆくのか、主人達は一体どうなるのか、一切わからない、そしてここは遠い遠い異郷なのだ、或はこれが生別死別にならないともかぎらない。

一瞬この四月余りの短い生活がつき上げる様に涙の中からよみ返る。

これしか仕方がないのだ、これが私達の歩く道といふものだ辛いことだがお互い暫くでも仏法をさき合へたのだ、それでいいではないか、元気でゐてくれプ
ラットフォームに佇む主人の瞳の囁きを充実したものともつかぬ気持ちで聞くのだつた。(『中外日報』昭和二十一年一月三〇日)

(二)

汽車は突然急停車した。前方で烈しい銃撃だ。平地泉という駅の一寸手前である。ソ連軍？ 匪賊？ 座席の下に伏したまま数刻、然しそれは簡単なゲリラ戦でもあつたらしい、やがて慎重なまどろかしい汽笛が私達をほつとさせてくれた。

大同で三百人近くが下車した張家口についてのはもう夜の十二時過ぎてゐた。駅は完全に燈火管制で眞暗だ。私は北京の友人の家まで行くつもりだつたので其処より先は危険で汽車が出ないとわかるとどうしていいやら、途方にくれた。出迎への人人につれられて下車した者はだんだん少くなる、あれこれと少しの縁故を辿つてみる、然し縁故といふには余りに馴染のうすい土地だつた。

暫し漸く同行して来た人の好意で大蒙公司といふ会社の宿舎に落ちついた時はもう疲れはてて幾分捨鉢にさへなつてゐた。

三時すぎだらうか、私達は叩きつける様な鋭い男のこゑに浅い眠りから起された。八月とは言へ大陸の夜は冷い。旅装もとかない私達はうながされるままに庭に整列する。淡い星の光りがぐるぐると宿舎の屋根を照らしてゐる、軍服をきた人のきびしい表情にはある切迫したものがあつた。私達ははつとかた唾をのんだ。

「張家口までくればと安心してをられる皆さんにこんなことは申上げにくいのですが止むを得ません。明朝までに或は皆さんにも死んで頂かねばならないかもしれない逼迫した情勢下に吾々はおかれてゐるのです、然し一応の覚悟はしておいて下さい。幸ひ当会社では軍から服用し易い薬品を頂きました。何も彼もさだめとおもひあきらめて下さい。然し或は死んで戴かなくてすむかもわかりません。といふのは明午前中に中支方面から救援部隊が来張するといふ情報があ

るのです。がそれまでに包囲されれば、我々は日本人らしく死なうではありませんか。」

無気味な緊張をあたへるとその人はさっさと暗を立去った。私達は黙然と佇むばかり。時折遠くから機関銃らしい銃声が無風帯の様な静寂さを破ると後はかさともしない。と誰かが耐りかねた様に溜息をつく。子供達もおびえたのか泣かうともしない。死んで耐るものか。たとへ一人になっても、とことこ歩いてでももう一度日本へ帰るのだ、怒りの様なかたまりが火の如く身体をかけ巡る。

「死ぬなんかいやだわ。私どんなにしても生きてくわ」

吐き出す様につぶやくと隅でぼそりSというお婆さんが言った。

「そんなこというても皆死ぬのやから仕方ない。死にませうかいな潔よう」

「いやなこと、死にたい人はお死になさいな。私木乃伊になつても日本へ帰るのよ」

「まあ安溪さん。もの凄く執念深いのねえ」誰かが深いこゑで言ふ。

顔にさす陽と噪やいた人ごゑに眼をさますと

「安溪さんの執念がとどいたわ、私達もう死ななくていいんですって、部隊がついたのよ、私達徹夜してたの、貴方よく眠れたわね」

「執念深いから眠れるのよ」

充血してゐる友達の眼を濟まなくおもひ乍らそれでも私達は冗談が言へる程もう落ちつきをとり戻してゐた。死の軛は去つた。これからどうなるか皆目わかないが何か仄々楽しくてならない、その裡また思ひがけなく局面が展開されて私達は伸びやかに空を仰げることだらう、蘇つた生命がくすぐるやうに小波となつて胸にみち溢れる。

山を崩し保塁でも築いてゐるのか、時折はぜるハツパの地響きも思ひを明るくしてくれるのだった。（『中外日報』昭和二年二月二日）

(三)

何といふ不潔さだらう、そして何といふ無秩序さだらう、私達はもう言葉にもできないぼろぼろの破れかぶれの気持ちである。荷物だ、完全にほりこまれた荷物である。然しこの抛り込まれた荷物は苦しいとおもふ感情をもつてゐる、辛いといふ気持ちをもつてゐる、それだけ悲惨だ、何といふ蒸暑さ、狭さ、それに雨までふりつづけるとは人々の表情には狂暴なまでこの現在の言ひ様もない苦痛から逃れたいといふ想ひがみなぎつてゐる。

ぼとぼとアンペラ屋根から滴りおちる雨滴、額にねばりつく冷汗、雨でぬれ切つた床、おびただしく匍ひ廻るウヂ虫、そして汽車はいつ出るとも知れず昨日から山間の小駅に停車したままだ。たとへ前にどんな危険が孕まれてゐるにしてもかうして無蓋車に詰めこまれたままでゐるよりは一そ硝煙弾雨の中をつき進んだ方がこの沈鬱な狂暴な感情の坩堝にはまり込んでゐるよりましである、こんな風につびきならぬおもひの頂点が破れると発狂するのも知れない、お互に推測し合ふ様な猜疑の裡にいつまでもいつまでもうずくまつてゐる。刺りに惨めではないか、事実このどん詰りの気分を消化し切れないで発狂したものもあるといふ、その中には発車してから家に子供を忘れてきたのを思ひ出し、愛着と後悔とにさいなまれた末気が違つて了つた若い母親もあった。子供も既に二人たふれた、そして大人達も疲労と不安とに困憊して醜く青冷めてゐる。誰一人として先の見透しはきかないのだ。生か死か、それさへもはかりがたい。敗戦国民の刺りにも悲惨な相だけが脳裡に絡みついてゐるばかりである。

私達は昼食を認めてゐる。そして八月十五日、あの怖ろしい夜があげてはつと一息ついた其日夢にも希めない陛下のおこゑをきいたことについて喋つてゐる。始めて伺へる陛下直接のお言葉が戦に敗れたことのお宣言だつたつて悲しいのね。まだ爆撃の怖ろしさも食料の欠乏も判つてゐない異郷の人達は寧ろ意外にさへおもふらしい、けれども三月まで内地にゐた私には戦に疲れ切つた日本の相が敗戦を当然としなければならぬのを知つてゐた。「だから外地でこそ意外で

あつても実はあのお勅語に内地の人はほつとしたことせう」私達は食卓をかこみ又しても同じことを繰り返すのだつた。その時「皆さん午後二時までに駅へ集まつて下さい。ここも引揚げねばならなくなりました」といふ知らせ。瞬間茫然となる、不図時計をみると十二時四十分、あと一時間廿分だ。一時間廿分、その間に一体何ができよう、布団包みを開いて手廻り品をつめこむ余裕もない。大人も子供も血眼になつてわずかな手廻り品をもち駅にかけつけた。駅には包頭や厚和から引揚げた邦人の荷物がまだ大半片づかずつた返つたままだ。漢人の苦力達が昨日までの支配者があはてふために逃れゆくさまを冷たく眺めてゐる。物価は旬日の裡に数倍以上昂騰してうっかり喰物も買へない。（『中外日報』昭和二十二年二月五日）

（四）

貨車にやつと載せられて自分の周囲を見渡した時今更のやうに驚く。一部の人だが闇軍服に下駄ばき、或はシミーズ一枚にうすものはをつた外には何ももたない人々のあることだつた。それでもともかく汽車にのれたことによつて生命の安全は保護されるかも知れない、もうその外に何ののぞむところがあらう。財産や地位への未練も生命欲の前には陽炎の様なほかないもえ立ちにしか過ぎない。

後に残されたすべてのものは掠奪せられ、火炎に壊えるだらう、だがそれでいいではないか。ともかく自分等は助かるかも知れない、命が全うできるかも知れない、汽車にのりさへすれば私達はかうして引率者も指導者もなく出鱈目に我武者羅に貨車にのり込み、北京へ、天津へ向かつたのだつた。

八路軍の列車破壊と絶え間ない襲撃とに芯までをびえつかれ切つて天津について日頃から既に五ヶ月隠してゐる。よくも今まで生かして頂けたものだ。その間には様々な辛さも苦しさもあつた。殊に十月十三日天津で起つたテロ事件は恰度そのさ中に（それはこの年頃の不満と反感とが華人側に爆発して、街頭の日本人が殴打された事件である）厚和で別れたきり消息不明となり生死を氣使つてゐた主人が殴られもせず帰りついでくれた日だつたので安堵と不安で悲喜交々だつたことも今になればなつかしい思ひ出の一つである。

今少し大使館や軍の指揮階級が落ちついて情勢を見極めてゐてくれたなら蒙古四万人の邦人達は北京天津の如く蔑まれてあれ程の惨さを味はわなくて済んだことだらう、多くの犠牲者も出さなくて終わつたに相違ない。最も今頃批判することは徒に当時の混乱した氣持をかきたてそれら指導階級への吐き捨てたい反感を喚び覚ますだけである。

ともかく私達は米軍の好意によつて故国へ帰りつけたのだ、そして海外にはまだ数百万がなつかしい故国への便りをまつてゐる。故国がたとへ今日の窮迫のどん底に喘いでゐようと、世相がはてしらず悪化して行かうとも、海外在留者には唯一の安息所なのだ。

ここは日本だ、朝起きる毎につぶやいてみる癖がまだ抜け切らないこのごろである。（完）（『中外日報』昭和二十二年二月六日）

おわりに

蒙古四万人の邦人が張家口に集結して逃れた先の北京や天津での「あれほどの惨めさ」については、ここには具体的に語られていない。ヨネからの伝来の家宝の懐剣の出番や、奄美は加計呂麻島出身の、美美子の父西田静馬と出口和仁三郎師（でぐち・おにさぶろう、一八七〇〜一九四八）との出会いが生んだ人脈による、美美子の天津の収容所からの脱出や引き揚げ途上のできことなどは、残された美美子の草稿を整理しつつ、稿を改めて紹介したいと思う。

謝辞

『中外日報』に掲載された文書と徳富蘇峰記念館資料の検索・コピーにあたって、もと中外日報記者の高橋由香里さんの手をわずらわせました。文化庁宗務課専門員の大澤広嗣さんには、巴利文化学院およびその後身の萩山道場についてのご教示をいただきました。中国貴州大学特聘教授の全京秀先生には、帝国日本における自分子的地域研究へのいつも変わらぬ励ましを受けています。香川葆晃と高嶋米峰の事績に関する史料収集にあたっては、文部科学省の科学研究費「幕末維新期の長州真宗僧に関する史料と口承による総合的研究」（研究課題番号：24520067）を使用しました。関係のみなさま、機関に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 安溪美美子、一九七五「峰床山」全文は、<http://ankei.jp/yuji/?n=821>
 安溪美美子、一九九九「記憶のある裡に——大正時代のある子供の生活」全文は、<http://ankei.jp/yuji/?n=132>
 Ankei Yuji, Ankei Takako, & Chun Kyung-soo, with comments by Suzuki Takayasu, Izao Tomio, Iwano Masako, & Amy Wilson, 2012, Four Priests of Yamaguchi who Saved Buddhism in Early Meiji Era Japan: a Study on Shimaji Mokurai, Ōzu Tetsunen, Akamatsu Renjō, and Kagawa Hōkō 『山口県立大学学術情報』5、三二〜五一頁
- 安溪遊地、二〇一五「他人ことからわがことへ——フィールドに育てられる」『平和研究』四四、七九〜九八頁、日本平和学会
- 安溪遊地・安溪貴子、二〇〇五「重源上人から山頭火まで——徳地町の語り部・赤木森さん大いに語る」『山口県立大学国際文化学部紀要』一一号、五五〜六七頁
- 安溪遊地・安溪貴子、二〇一二「越の国巡礼——幕末維新長州僧の足跡をたどる旅」『季刊東北学』三〇号、一六五〜一九三頁
- 大澤広嗣、二〇一五『戦時下の日本仏教と南方地域』法蔵館
- 門田隆将、二〇一三『この命、義に捧ぐ——台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』角川書店
- 財団法人仏教圏協会、一九四三『萩山道場要覧』
- 全京秀 (Chun Kyung-soo)、印刷中「植民地経験は一度始まると終らない——我が家系に刻まれた帝国の遺産」『韓国研究センター年報』一六号、一〜一〇頁、九州大学
- 種田山頭火、一九三九『旅日記 昭和一四年』青空文庫で公開中
http://www.aozora.gr.jp/cards/000146/files/49783_39467.html (二〇一五年十二月十八日最終閲覧)

Martial Arts of the Feudal Clan of Mōri, Haiku Poet Santōka, and Repatriates from Inner Mongolia: Written records and memories on Matani Ruikotsu and his adopted daughter Fumiko

Ankei Yuji

This is a collection of the records written by a journalist and an opinion-leader in the domain of religion: MATANI Ruikotsu (1869-1956). It is supplemented by the manuscripts and narratives of his adopted daughter Fumiko (1919-1999). As one of her sons, I used to listen to her tell of adventures in Kyoto, Yamaguchi, and Inner Mongolia during the time of Imperial Japan.

At the age of five, she met with her mother's mother Yone. Having grown up in a family belonging to the Feudal Clan of Mōri (today's Yamaguchi), Yone herself was like a samurai. When Fumiko began working in the newspaper company Chūgai Nippō in 1928, the owner-editor of the paper Ruikotsu made her to work as his secretary. Among many other celebrities, she encountered a vagabond Haiku poet Santōka. When she decided to seek refuge from the ultra-patriotism of Imperial Japan, she took a honeymoon in a remote place: Inner Mongolia, where her future husband worked for the intelligence services as a young Buddhist.